

205 室戸半島南端部の四万十累層群

長沼幸男(大宮・馬宮中)・矢島敏彦(埼玉大学・教育)
梶間幹雄(インドネシア通商)

室戸半島南端部付近の室戸半島層群は、下位より坂本層・室津層および椎名層に区分され、下位層と上位層は各々整合に接する。岩相は各層とも泥質岩を主体とし、これに砂岩・砂岩泥岩互層・凝灰質岩および塩基性火成岩類を伴う。各層の概要は次の通りである。

坂本層は、主として北東—南西の走向をもって分布するが、東海岸では波長の短い波曲構造をなしている。層厚は西海岸で2000 m、東海岸で1100 mとなっており、全体的に北東方向に薄くなる。また、粗粒碎屑岩(砂岩・砂岩勝ち互層)も北東に向かうにつれて急激に薄化・尖滅する。一方、波曲構造の頂部付近でも粗粒碎屑岩は薄化もしくは欠如する傾向が強い。地質構造は、半島南端に背斜軸があり、本層はこの背斜の北西翼とみなされる。東海岸に沿って室戸岬はんれい岩体(層状分化岩体)をはじめ、多数の小はんれい岩体や粗粒玄武岩の岩脈が認められ、これら火成岩類は主に波曲構造の翼部に集中する。

室津層は、約3500 mの層厚を有するが、東西に走る室津—三津断層によってその分布は二分されている。断層の南側には本層下半部が分布し、走向は北東—南西で、北西傾斜の単斜構造をなす。粗粒碎屑岩は北東方向に薄化・尖滅する。断層の北側には本層上半部が分布し、走向は略東—西で、北傾斜の単斜構造をなすが、東海岸の丸山付近で顕著な波曲構造を示す。この波曲構造の翼部には、丸山はんれい岩体(層状分化岩体)のほか、小はんれい岩体や粗粒玄武岩の岩脈が認められる。

椎名層は、東西性の軸をもつ褶曲構造をなし、層厚は680 m(+)である。東海岸沿いに分布する枕状溶岩や各種火山物質は、側方(西方)で急激に碎屑岩類に移化する。

